

J2.992:6

6 59

* Mutsura

67/14
C

六
浦

六浦ムツ

わき
股連
次第
和
小ノリ

思ひやるさへ遙なる思ひやるさへ遙なる
東の旅に出たりよ
これは洛陽邊

に住まひする僧にては我未だ東國を見

ずは程に此の秋思ひ立ち東國に下りそ

れより陸奥の終まで行脚アンギヤせばやと思ひヤ

月澄み海に庭にありて。僧は回向を候くるところに。楓の精は美しき官女の
 姿にて再び現れ、草木四季の眺めを語りて暮るを奏て。明才近接ふ。
 草木の精を主人公とする太鼓の序の舞の曲は、他に遊り折や西の楊柳が
 あるが、それは、おは、おは、全く趣を異にし、女姿なら杜若は伊勢物語を歌
 故のに、ちや、呉が、歌う、まづ、此の曲は唯一首の和歌を骨子として、うらはは、さ
 女性のおおひ奏する態を描いたもので、内容は至る単純である。後、こゝ
 前、お面の情緒といふもの、錯綜する葛藤もある。春の花下なく
 秋の紅葉である、と、根本的の色彩を語らず。嬌うなく、爽やかに、真実美に
 満ちるもの、体成すものがある。

役

一 里女 季所 香櫓
 後 楓の精 武 順 順 古

座

(面 正)

一

別

わき 僧
 照連 後僧二人

秋

浦六 國三 曙 謡 能
 (一 鼓) 一 一

順

わき

照連

より起るとか。遙か思ひし道なれども、
日を重ねて、急ぎし程に。これははや相
模の國六浦の里とかや申しけ。此の渡
りをとて安房の清澄キヨスミへ参る由申しけ。
(元をかく)又とれなる寺も人に問へば、六浦の禰名シヨオミヨ
寺ジとかや申しけ。立ち寄り一見せばやと

あき
連
道行

逢坂の關の杉むら道ぎがてに關の杉

むら過ぎがてに行くも遠き湖の船路

を渡り山を越へ幾夜な夜なの草枕

明け行く空も星月夜鎌倉山を越え

過ぎて六浦の里に著きにけり六浦の里

に著きにけり
千里の行も一歩

の無き事はしまじ尋ねばやと思ひ

しゞカ品（しょうじかひん）

なりく浄僧は何事を仰せらぞ

わま

さんがこれは都の者にてやが。此處、初

めそ一見仕りの所に。これなる楓の木一

葉も紅葉せし程に。不審をなし依

らひし
しゞ（しょうじ）げに御不審は浄理にては。
（おんこころ）

(ヤ、同ヲイテミツカヘリ立)

思ひにあら面白の所やどなりくも覧

し。山々の紅葉今を盛サカリと見えて。さ

ながら錦を晒せる如くにては。やはお

都らてもやりの紅葉はいはじ。又これ

なるが堂の庭に木立餘の本に勝スゲれた

る楓カイテのや。一葉も紅葉せず。謂はれ

もみぢ葉と詠み給ひしより。今よ紅葉を

止めて^{トド}あら面白の御詠歌やな。我^{ワレ}

数なりぬ身なれども手向^{テムケ}の為にかくば

り。古^コり果つる此の一本の跡を見て。袖の時雨

は山に先立つ^トあら有難の御手向^{オムケ}や

な。彌々此の木の面目にてこそ^{わき}さてく

イニシエ

これは古録倉の中納言為相の卿と

タノスケ

申へ人。紅葉を見人として此處に下り

タノイ

繪^{イマ}ば。山の紅葉^{イマ}未だなりしに。此の

ヒトモ

コオヨオ

タグイ

一本に限り紅葉色深^{イマ}く類無かりし

中

かは。為相の卿取敢へず。いかにして

ヒトモト

(物子こ合(ズ))

此の一本に時雨^{イマ}れけん山に先立つ庭の

コカレウ

にも預かりき。功成り名遂げて身退くは。

これ天の道なりといふ古き詞を深く信じ。

今に紅葉を止めつ。只常盤木の如くなり

これは不思議の御事かな。此の本の心を

かほどまで知^{シロ}りたる御身はさて。如何

なる人にまゝますぞ。今は何をか

先の為相の卿の御詠歌に預りしより。

今に紅葉を止めたる。謂はれは如何なる

事やらん 先の為相の卿の御詠歌

に預かりし時。此の本心に思ふやう。かゝる

東の山陰の人も通はぬ古寺の庭に我先

立ちて紅葉せずはいかゞ妙なる御詠歌

包むべき。我は此の本の精なるが。お僧貴く

まします故に。只今ここに来りたり。今宵

はとに旅居して。夜もすがら御法を説

き給はゞ。重ねて姿を見え申さんと

同者
夕べの空も凄じき。此の古寺の庭の面霧

の籬の露深き。千草の花を掻き分け

同音

上
一
ウケテオウリ

花葉様々の其の姿を心無^くとは誰か云ふ

17

(シズカ)

まづ青陽の春の初

同音

力

色香妙なる梅が

枝のかつ咲き初めて諸人の心や春になりぬらん

4

同音

神一

七



人

一

又は櫻の花盛

只雲とのみ三吉野の千本

今中三ノ人

あ

一

ト
リ
中

三

10

10

の花に。如くは無^う。

十

曲△

月

日經

7

不支

は

雙

一
声
（拍子三合）

あゝ有難の御申やな。妙なる値遇の縁に

引かれて、再びこゝに來りたり。夢は覺

し給ふなよ

わき
（サラリ）

不思議やな月澄み渡る

庭の面にありつゝ女と思へて、影の如く

に見え給ふぞや。草木國土悉皆成佛の此

の妙文を疑ひ給はで。猶々昔を語り給へ

（お掛
キカス）

六浦

る眺めを。櫻は散りて庭の面に咲き續く卯
の花の垣根や雪に紛ふらん。時移り夏暮れ
秋も半ばになりぬれば空定め無き村時雨。昨
日は淡きもみぢ葉も露時雨漏る山は下葉
残らぬ色もや。さるにても東の奥の
山里に。あむらさまなる都人のあはれも

同音

オ

ウ

エ

オ

オ

ウ

エ

オ

オ

ウ

エ

オ

オ

ウ

エ

か
げ
ろ
ふ
姿
と
な
り
に
け
り
△

八聲の鳥も數々に
 鐘も聞ゆる
 浦の浦風山風吹きしをり散るも
 みぢ葉の月に照り添ひて唐紅の庭の面明け
 なば恥づかし暇申し歸る山路に行くかと思
 へば木の間の月の行くかと思へば木の間の月の

喜多流謡曲ノ内

千八百四十四年六月

榎本暢弘
写之